



理事会だより (10・14)

一、文化の日俳句大会について、新型コロナウイルスの緊急事態宣言解除を受け当日同宣言が発せられていないことを前提に実施することを全員一致で決定。当日の留意事項、役員の十時半集合、大会の流れ、役割分担などを確認。当日参加意志表示が66名、不明が12名で予備室確保済。

二、秋の吟行会につき上位入賞者五名に短冊手交、会計等実施報告(総務部)

三、第五八回梅まつり俳句大会は①4年2月6日②実施時間は文化の日大会に準ず③兼題・梅、寒晴④投句締切3年12月24日(前回より短かいので注意)⑤選者特選賞・佃名誉会長、大石顧問、池田会長、おほる、鹿火屋、こよろぎ⑤結社賞などを決定。

四 立春句会は観光協会の意向を受け4年2月4日実施と決定。(詳細は協会報12月号にて) 2頁に続く

「俳句おだわら」10句抄 (650号より)

長谷川きよ志 抄出

コロナ下の古都の古刹の花手水
そよりともせぬ河童忌の水辺かな

小宮 早苗

「最後まで」つぶやきながら梅を干す

勝木 澄子

あの日から七十六年原爆忌

加藤まり子

玉虫の羽根はみどりに太古より

青木たけを

開幕のベルを鳴らして梅雨明け

秋山 昇

尊徳の治水の岸や瓜の花

尾崎 竹詩

手火花や庭にうちの子隣の子

百川 秀子

盆踊り阿保阿保と哀しけり

小林 環

山田照子 抄出

夕風の静かに抜ける冷奴

穂坂志げる

そよりともせぬ河童忌の水辺かな

中根登美子

夏萩やはんなり返す京ことば

陌間みどり

透きとほるものへ箸ゆく夏料理

加藤まり子

生きるとは口を開くこと燕の子

加藤かほる

水甕が増えて緋目高白目高

中根 和子

黒日傘ベンチにねかせ樹木葬

杉崎 せつ

ひとごとのやうにままこのしりぬぐひ

小島ノブヨキ

鯛や噂に耳を持たずして

小澤 園子

「カリ」つと踏んでしまったかたつむり

岡田 典代

”フラワーセンター“ 秋の吟行会

十月十日、当日開催されていたシダ植物展との密や天候不安も無事クリアして、二十六名の参加者で和やかに行われた。合点ではなく一句一点法で、披講は選句者一人ひとりが行った。

佃名誉会長、新井顧問、池田会長に講評をいただいた後、参加者は菓子をおみやげに散会した。

(当日囁目三点投句、高点句順)

水の辺の草しづくより秋のこゑ
触れ合うてコスモス風を放しけり
しばらくは白萩に寄り池に寄り
朝露のひかり残れる諏訪の原
木の実降る古墳の空の遠きかな

(以下受付順)

コスモスの彩の高さの風もらう
お相手は誰秋バラの名はポニカ
日の差せば応へて風の秋桜
おんぶ子の首廻しけり秋あかね
バラ園に深入り秋の息遣い
コスモス揺れ内緒ばなしは風のもの
秋吟行古い季寄せを道連れに
南無南無と雨粒ためて蓼の花

池田 忠山
田中 幸子
新井たか志
山田 照子
芹澤 常子

田畑ヒロ子
加藤かほる
島 梅乃
田中 恵一
佃 悦夫
木村 幸枝
加藤れい子
寶子山京子

秋うららてふ安易な季語や秋うらら

秋桜や双子を載せるベビーカー

三色のマリーゴールド帯のごと

尺八の聞こゆる家や菊の花

引き潮のやうにしづかに秋行けり

秋澄むや樹々の氣息のあふれるし

薔薇の秋まだ未来あり旅進め

ベンチには貼紙二枚鱒雲

楠大樹翳の深きや秋の昼

いつまでもひとつの石に石叩

秋園の池静かなり空は青

満天星に紅葉始まる諏訪の原

故郷の話聞かせてくれよ赤蜻蛉

(担当 総務部 岡本史郎 報)

長谷川きよ志

瀬戸 りん

中野 文子

鳥海 壮六

伊藤はる子

近藤 久江

岡本 史郎

小野 菊土

須田 聡子

村場 十五

若村 京子

齊藤 桂

佐々木重満

(ア) 理事会だより 続き)

五、会長指名委員会委員に長谷川・山田副会長、佐々木・寶子山・村場部長、近藤・小野・齊藤・加藤理事9人を選任。
六、おおい夢の里俳句大会後援を承認。

*

〔投稿〕

父 大野西湘子のこと

澤田 陽子

父はチラシを見過ごすことができなかった。新聞広告もとより、駅に積んである催しものの宣伝、商店街の大売り出しのビラ、宗教の勧誘のパンフレットまで、紙に出会うと家に持ち帰り、チラシを内側に折り畳んで大きなクリップにはさむ。内容ではなく、裏の白紙が父には大事なのだ。それは昼間は机の上に、寝るときは枕元に鉛筆と一緒に置かれた。ふと降りてきた思いつきを逃さぬようにとの用心である。昭和四十年代、今のような天然色の両面刷りのものではなく、片面単色、手書きのような広告紙、それが父の俳句手帳であった。

家事は何一つできない父が、季節ごとに雑誌の虫干し、短冊のかけ替えと、俳句のことは誠にまめであった。記憶の中の父は机に向かって物を書き、本を読む姿であるが、父の書架に小説は一冊もなく、すべてが俳句に関する本、まれに草花や生き物の図鑑が混じっていた。尋常小学校の先生から俳句の手ほどきを受けて以来、九十で亡くなるまで、俳句を手放すことはなかった。いい俳句を作りたいという希求を常に持って

いたこともあるが、ひとえに父が良いお仲間にも恵まれたおかげである。俳句の集まりはそれが会合であれ大会であれ、何よりの楽しみで日々の励みであった。小田原俳句協会は、実の子供より可愛いものだったように、出かける日は機嫌がよく足取りが軽かった。あんなに強情な喧嘩っ早い頑固者のお守りは大変だったはずだ。さらに晩年は目を悪くして頓珍漢だったと思うが、父の見栄っ張りを知らぬお仲間が、恥をかかせぬよう上手にサポートしてくださった。そこに行けば老いも病も吹き飛んだことだと思ふ。家族の力の及ばないことを、俳句のお仲間は担ってくださいましたのだ。感謝の一言である。

東京の羅紗問屋で丁稚奉公を勤めた数年と、戦争に取られた何年かを除けば、小田原から出たことのない一生であった。小田原に生を享けたことを父は幸運に感じていたのか、「西湘子」を名乗ったことはその表れかもしれない。相模灘、御幸の浜、小田原城、酒匂川、尊徳忌。父の愛した景色、俳句を生んだ背景である。俳句は父の人生を豊かに彩ってくれた。小田原俳句協会は父に活力をくれた。

佃悦夫様の「俳句の岸辺」を不思議な道筋からのご縁で手にする幸運を得た。ここでご勇退だそうで、長くおつとめされたことを父はどんなにありがたく思い、

喜んでいるかもしれない。俳句には門外漢の私が、おこがましくも拙い一文を書かせていただく決心をしたのは、父の記事をたくさん載せてくださった佃様にお礼を申しあげたかったことが最大の理由だが、「関係者の遺族から一言を」というお誘いに、今年父の十三回忌の法要の年であったことも私の背中を押した。「俺は女の出しゃばりはでえつきれないんだよ、みっともねえこと書きなさんなよ、何にも知らねえんだから」と父の声が聞こえてくる。たくさんの封筒に「会報だろうか、お知らせを入れ、切手を貼る父の姿が思い出される。そういえば我が家の郵便受けには、「大野」の苗字よりも先に「小田原俳句協会」の文字が書かれていた。

「小田原俳句協会」、私には子守唄のような響きである。今後のご発展を心よりお祈り申し上げます。

立春句会のお知らせ

日時 令和四年二月四日(金)
 集合 小田原城天守閣本丸広場・時計塔前

・短冊つるし後句会場にて投句・短冊は11月理事會にて配布

句会場 小田原市民センターUMECO第2会議室

*詳細は十二月号にて

俳句おだわら (10・19メ切り、到着順)

◆鹿火屋(9・24)

久江報

一期一会金木犀の香のいのち

足立 和子

潮の香の塔の十字架小鳥来る

川本 育子

生きてゐてこそ至福や新酒汲む

高橋 小糸

幾度の出会ひと別れ秋夕焼け

山崎 悦子

曼珠沙華溢るる野辺を夫と共に

近藤 久江

◆みなみ(9・18)

かほる報

青空に煙あそばせ秋刀魚焼く

小瀬村信子

飲めもせぬ新酒試飲の盃に

加藤れい子

山里にモダンアートの案山子かな

村上 龍山

千本の刺のささやき栗甘し

加藤 富枝

赤飯の蒸し布乾く野菊晴

豊田 幸枝

屁理屈を並べて秋刀魚食う男

市川めぐみ

父と子の小さな旅や秋高し

斉藤 静

裏返す箸の手応え初秋刀魚

加藤 健治

里ことば入れて商うリング売り

飯田 愛

生き急ぐ速さに飛べり秋の蝶

加藤かほる

◆香雨・梅ごち(9・26)

忠山報

ひとり言日ごと増えゆくそぞろ寒

肥後ちさこ

淡き脈 近藤久江

万葉集の序文さやかや墨奔る
 古文書の墨の香ことに冷まじや
 文人画の余白息づく秋意かな
 筆先に余韻の欲しや秋の風
 賞状の軽き起筆やさやかなる
 行間にさやかな刻や和歌一首
 故郷恋ふ李白の漢詩残る虫
 山よりのひかりに濡れて蕎麦の花
 秋桜風聴きリズム採りにけり
 コスモスの散るとき淡き脈打てり

鶏頭花 加藤かほる

秋風を反芻したる牧の牛
 トランプは大判施設の敬老日
 じゃんけんには負けたるように青柿落つ
 落柿の踏まれ再生なき傷心
 夕さりの鶏頭歩き出す気配
 うずくまる子狐の影彼岸花
 魚群探知機に捕まっている鯛雲
 群れていてどこかに孤独ねこじやらし
 昭和の影引つ張つて来る秋茜
 ふと秋思夕べの曲にある余韻

切株の朽ちし腰かけ秋の風

実るもの多き食卓秋彼岸

菩提寺へ向かふ道すぢ彼岸花

秋の夜にかけては外す老眼鏡

秋晴や大空うつる大玻璃戸

ていねいに解く箱書小望月

稲刈られ風が素通りしてゆきぬ

月白や富士の暮るるを待たずして

◆青梅(10・14)

秋の雲富士を被ひて暮れにけり

小春日やひよいと顔だす神経痛

コロナ禍の日々にしあれど季は秋

行秋や薬草煮出す尼の寺

落葉掃く朝餉の前の一仕事

豊の秋養生講座に昔ガキ

団栗の径会釈してすれ違ふ

◆実のり(10・6)

禅寺の長き石段夕紅葉

駅窓のステンドグラス秋日差す

灯火親し指人形の待つ朝

貯木場の裸丸太や秋日射

関戸わよこ

青山 典子

門松 鳳文

吉田 百代

吉田 康雄

陌間みどり

小澤 純子

池田 忠山

幸子報

大塚 行人

湯本とし子

神野美代子

加藤まり子

久保寺トミ子

田測 令子

田中 幸子

たか志報

岩本ひさみ

杉本 久子

木村 幸枝

新井たか志

花木権 竹下由里子

花木権滑舌ドリル基本編
 水栽培のような言葉や蚯蚓鳴く
 つくつくし先端裂けし指サツク
 鴉日和ト音記号のイヤリング
 かまつかや音階めきし海の色
 左右なき室内履や秋灯
 箆につくモヤシの匂い秋の蝉
 思いがけぬ所へ飛び火吾亦紅
 齒ブラシの取替時か曼珠沙華
 星月夜「みんなのうた」を道連れに

秋の徒然 佐々木重満

隴夜や捉えどころのなき量子
 秋の虹ニユートリノが通り過ぐ
 鶏頭花炎なりしや子規の脳
 飛蝗跳ぶ吾を始祖鳥と思うかな
 名月や干戈の尽きぬ水の星
 水引の花 循環小数の並び
 砂金なら金堂寄進金胡麻叩く
 零余子蔓五体欠けゆく手前かな
 昼ちちろ孤独の闇を背なに乗せ
 山葡萄食む悪童の血甦る

◆こよろぎ (10・14)

葛咲くや癌病室の壁の染み
 透かし見るワイングラスの夕紅葉
 夜食欲るひとり厨の灯の下で

つとむ報

板谷 雅泉

植松テル子

神山つとむ

◆零 (10・18)

史郎報

どつちかと言えば嫌いや曼珠沙華

青木たけを

秋風を追いつ追われつ足のリハ

川合 昌子

懐かしむ母の塩味零余子飯

木村 和彦

新藁の香り撒きたる脱穀機

野川木一路

数珠玉は幼き友の思い出だ

井上 良子

十六夜の月の揺蕩う船着き場

中村 裕子

新藁へ跳ねて婆つちゃん少女なる

伊藤 道郎

数珠玉やつなげてつなぎまあるい笑顔

佐藤 正子

隠れ家は新藁詰まった納屋二階

岡本 史郎

◆春野 (9・19)

きよ志報

貝がらを操るやうに望の潮

伊藤はる子

風爽やか老犬今は鎖無し

二見 和江

萩刈つて死後に思ひを残すまじ

瀬戸 悠

天井の木目くつきり瀬祭忌

内田知江子

死んだ振りしても一人や芋の露

尾崎 一夫

寡男の家色なき風の中にな

秋山 昇

石路の庭 中根登美子

楷明り明日へつなぐ志
 その先へ光を放つ烏瓜
 登校の列に割り込む金木屋
 菊日和大和言葉の韻を踏む
 式部の実筆筒にねむるははの着物^{もの}
 紅葉かつ散る遺品持ち込む無言館
 指先に土の声聞く秋収め
 青春の息整えて落椿
 ほどほどに暮らしのリズム石路の庭
 一陽来復小春日の足音

秋の深さの 田畑ヒロ子

正調の民謡も良し稲穂垂る
 乱れ萩起こせば風の変わりたる
 名月や笛一管を遊ばせぬ
 秋麗猛犬の居る白い家
 人悼む零余子ホロホロ零れたり
 秋暑し駅から十分なんて嘘
 古民家の生活俤ぶや小鳥くる
 声明のように虫時雨の増焔
 もののふの魂の鎮もる菊あまた
 灯明や秋の深さの火先かな

打水や夜がひたひた降りて来る 長谷川きよ志

◆沈丁(10・2)

寶子山報

豊の秋爺爺はだまつて鎌を研ぐ 中野 文子

荷ひとつ送るに混むや豊の秋 若村 京子

人の手と神の綱なる豊の秋 柳澤ミサ子

喜寿米寿白寿乾杯豊の秋 田中 恵一

豊年や病をいやすパワーあり 河本 純子

おばあちのヤサイ完売豊の秋 瀧本 敦子

籠る日をたんたんとき豊の秋 勝木 澄子

出来秋やソーラーパネルのワット数 菅野 英余

豊の秋弟のでき褒むる兄 高井 幸子

前向きに並ぶ野良着や豊の秋 片野 節子

豊年や源泉かけ流しをはしご 寶子山京子

◆鷹(10・2)

十五報

新蕎麦や暖簾短かき木曾の店 青木 孝子

この郷^{さと}や何は扱措き新蕎麦と 西賀 久實

虫時雨寺に雑魚寝をせしことも 佐宗 欣二

床の間の姫鏡台や菊の宿 須田 晴美

脹脛ゆつくり摩る良夜かな 中田 笑子

尻乗せて選^{すく}るソファーや豊の秋 百川 秀子

広縁に波音近き良夜かな 山崎美知子

風切羽 寶子山京子

天高し車線変更には微笑
 顔上げよ松虫草とわたし達
 蓼の花足音揃ふこともある
 鳥兜母性はいつも揺れてゐる
 地球あまねく電波は走る菊枕
 桜モミヂは風切羽になりさうだ
 秋深し握つたものは離さない
 八丈すすき猫の眉間の喧嘩傷
 青年の息は特段木賊刈る
 けふもまた柿を数へてゐるらしき

父の墓 陌間みどり

老年やかくも明るく銀杏散る
 エスプレッソ泡をふんはり冬に入る
 長病の地窓に石露の花あかり
 待ち侘びてまだ来ぬ便り初しぐれ
 柗の花たをやかに通す意地
 幸せに気づかぬことも帰り花
 玉砂利を踏みて厠へ花八手
 幼なにも秘密ありけり龍の玉
 やさしさを隠すやさしさ枇杷の花
 小春日の居心地の良さ父の墓

休暇果つ針跡多き展翹板
 秋高し天文好きと地層好き
 さはやかや赤き襷紗に茶器ぬぐふ
 蛇穴に入る政争の愚なりけり
 灯の消えぬ職員室や虫集く
 二の腕のさみしき朝の芙蓉かな
 秋燕や昼の彼方に夜の国
 月見草ぶつきらぼうに鳥鳴く
 えびせんの袋軽しやすいつちよん
 台風過渚にもどる波の音
 文鎮は古きハーケン醉芙蓉
 文机を持たぬ半生草の花
 鯉泳ぐ濠にせり出す夕紅葉
 苦瓜や仏頂面の吾が息子
 大仏の視線に応ふ秋思かな
 自粛して嵩む食費や虫の声
 コスモスや運搬車より馬の貌
 晩学や変化なき夜も日記書く
 シーソーにひとり座りて秋夕焼
 畳紙に母の字残る夜寒かな
 湾風て海光る駅祈り虫

庄司 下載
 瀬戸 りん
 高橋久美子
 中山智津子
 齊藤 桂
 芹澤 常子
 畠 梅乃
 山口安規子
 大木 敬子
 北崎 修
 田下 昌人
 中根 和子
 市川 好子
 加藤 幾代
 高橋 正子
 守屋 まち
 米山 翠
 來田 新子
 大沢 年子
 片野 秋子
 小林 環

模型指す医者の説明冬浅し

近藤 絢子

言霊は朝日のごとし小鳥来る

下平 美子

馬の背に乗りて異次元秋澄めり

杉崎 せつ

隙間ある古き建具や秋の風

関根 琉子

丹沢へ飛んで行くなり秋の蝶

鳥海 壮六

鳴鳴くや小さき順より靴を干す

古屋 徳男

夜寒さの推理小説大団円

村場 十五

◆たけのこ(10・6)

悦女報

新芋の届いて郷の姉元気

徳田 公子

うかと出て家路は遠し大花野

小宮 早苗

橋上に佇みひとり秋落暉

久津間百合子

青い鳥イソヒヨドリや秋の空

三木 泰子

樽田に一陣の風匂ひ立つ

宮崎 悦女

◆おほる(10・13)

昌男報

金木犀夜明けの星となりて散る

香川 花子

朝餉時俺も居るぞと籠の虫

風間 秀泰

筆文字の便り嬉しや虫しぐれ

加藤 春江

ふるさとへ続くこの道思草

瀬戸とみ子

一口で顔のほぐるる今年米

高橋みどり

子と孫で無形の祝い敬老日

中津川春江

地虫鳴く地軸ゆるがす夜の地震

中根登美子

影を連れ急ぐ家路や虫すだく

中村 昌男

虫の音や不協和音のなき調べ

廣田 悦子

生きているそれだけで良し天高し

二上 光子

捨案山子夜すがら星に語るらし

横塚 昌平

虫の音やしばし文箱を開けたまま

石井きよ子

日暮まで遊びつきない藁ぼっち

石井千代子

一人居の孤独とあそぶ長き夜

小野 菊土

◆山北(9・30)

由里子報

省略のふえし暮しや秋の風

和田恵美子

法要の経おわる鉦桐一葉

尾崎 幸子

大の字に寝る突堤やいわし雲

中山 妙子

穂ススキが触れるに委す車椅子

尾崎 竹詩

キシキシと栗剥く夜の婆の背

石田加津子

餡パンの中の空洞いわし雲

竹下由里子

◆草むら(10・18)

重満報

野の花のやうな夫婦や五十年

石井 秀稀

生き様も中より小へ夜長し

井上 和子

夏帽子東夷の固有種だと

佃 悦夫

零余子蔓五体欠けゆく手前かな

佐々木重満

◆無所属

縁側に足をぶらぶら待つ流星

小林永以子

冬瓜のつべこべ言はぬ面構へ

北村 文江

夫寡黙妻は饒舌栗をむく

一ノ瀬茂代

唸り声上げ恐竜の草刈機

木村美千代

秋暑し土の香たたせにわか雨

出澤 洋子

秋晴れの知れぬ深さに父母忍ぶ

鈴木久美子

ピアスは雫黒衣にひそむ秋しめり

須田 聡子

せせらぎに添ひて散策秋惜しむ

青木 勝子

暮のそり坐骨神経痛を病み

小島ノブヨシ

菊人形ウルトラマンがいよいよ

岩楯恵津子

穴まどひ背なのフアスナー噛んでいる

山口 千代

約束をしたかの様に曼殊沙華

山田 照子

秋薔薇はマリーアントワネットなり

田畑ヒロ子

すれ違う少年の香や星月夜

穂坂志げる

愛というエゴ蒼空に柿びつしり

小澤 園子

山上は鳥渡り船渡るなり

大石 雄介

われは芋洗う渋谷スクランブル交差点大石

和子

震災忌部分入歯をかちと嵌め

杉山あけみ

コンビニのコピー機真つ黒なおでん

瀬戸 正洋

赤とんぼショベルカーの川整備

岡田 典代

妹転居秋の七草もう来ない

蓑宮 わか

新作5句

市川めぐみ

白萩に生きる証の職決める
ゆく風を追う風白し芒原
酔芙蓉昨日のことはもう忘れ
高原へ誘う童謡赤とんぼ
風に乗る声のいろいろ萩白し

環

前山の雲薄れゆく葛の花
さつまいもふかし優しさとりもどす
温め酒ゆつくり下がる喉仏
虫の音や布巾さらして一日終ゆ
衣被時代を追はぬ自由かな

小林

園の秋先生一人にまつはる手

文子

秋日和ハガキ真中の「ありがとう」

澤口

針山は母を恋ふ場所秋ともし
名月や卒寿を過ぎし師への文
せがまれてグリム童話に更く夜長

鈴木久美子

波瑠皿にスイカ盛りても一人かな
蝉の声ふいに季節を盛り上げる
みんみんの遠くの方に声張れり
踊浴衣おけさ節よと輪の楽し
外出もかなわぬ帽子夏果つる

第11回おいゆめの里俳句大会

第一部 作品募集

兼題 「春の土」「うららか」(いずれも傍題可)

各一句一組 未発表作品に限る

締切 令和四年一月十七日(月) 必着

整理費 一組に付き千円(句稿に同封、何組でも可)

投句先 〒258・0019 足柄上郡大井町金子二〇二四―一三三

二上光子 ☎〇四六五(八三) 一三三五八

*作品は原稿どおり印刷します。

選者 俳句協会役員及び各地有力作家(投句者に限る)

賞 町長賞以下十五位まで

第二部 俳句大会

日時 令和四年三月五日(土)

会場 町立そうわ会館(大井町山田五〇二)駐車場完備

☎〇四六五(八五) 一六〇一

送迎バス小田急線新松田駅十一時三十分

受付 十二時 投句締切・十三時 開会・十三時

整理費 五百円

席題 春季雑詠一句と当日発表席題一句 相互選

賞 五十位まで

(主催) おほる俳句会(後援) 大井町 大井町教育委

員会 大井町文化団体連絡協議会 小田原俳句協会

神奈川県俳句連盟 各地俳句会

― 新作 5 句 ―

百川 秀子

あぐらゐ
胡床居にミレーの画集豊の秋

黄落やカウベルの鳴る喫茶店

蜻蛉や白川郷の広座敷

軒下に薬草乾く冬隣

行く人のシヨール見てゐる発車まで

『零』句集第17集一句抄(令和三年六月発行)

ぶらんこを漕ぐ始祖鳥になりたくて 木村 和彦

冬夕焼け学童保育に灯の点る 青木たけを

春を脱ぐように自転車野に放り 伊藤 道郎

葛の花しげみにちようががいるようだ 井上 良子

滝は父滝壺は母傷あまた 岡本 史郎

座りっぱなしの青蛙の欠伸判るな― 川合 昌子

消しゴムで消せぬ言葉や隙間風 佐藤 正子

やわらかや母の指跡草の餅 中村 裕子

無人駅卒業の子一人降り 野川木 一路

理事会日程(各月第二木曜日) 12/9 1/13

第58回小田原梅まつり俳句大会

第一部 作品募集

兼題 「梅」「寒晴」(いずれも傍題可) 各一句一組

未発表作品に限る

締切 令和三年十二月二日(金) 必着

整理費 一組に付き千円(句稿に同封、何組でも可)

投句先 〒258・0019 足柄上郡大井町金子三〇三五―七

田畑ヒロ子 ☎〇九〇―四五四三―五〇三四

*作品は原稿どおり印刷します。

選者 協会役員及び各地有力作家(投句者に限る)

賞 県知事賞以下二十位まで 選者特選賞六人

第二部 俳句大会

日時 令和四年二月六日(日)

会場 小田原市民交流センター(UMECO)

受付 十二時 投句締切・十三時 開会・十三時半

整理費 五百円(呈飲料)

席題 春季雑詠一句と席題当日発表一句 総互選

賞 市長賞以下五十位まで(結社賞含む) 参加賞

(主催) 小田原市観光協会 (主管) 小田原俳句協会

(後援) 各地俳句協会

*各グループは当日までに結社賞をご用意下さい。

*お願い 会場は食事禁止のため各自済ませてください。状況によって第二部中止の時はご連絡します。

令和三年年間ベスト一句集案内

一、全会員に、令和3年中の作品からベスト一句を自選していただきます。協会報とは限らず各人の全発表作品を対象として下さい。

一、各グループごとにとりまとめて下さい。グループの責任者には別途そのお願いをさし上げます。

一、無所属各位は、広報部あて「ベスト一句集」としてはがきで送稿して下さい。

一、メ切り 令和4年1月13日(2月号掲載)

一、送稿先 〒250・0042 小田原市荻窪五四九―一七

小田原俳句協会広報部 村場十五

広報部より

佃悦夫名誉会長の「俳句の岸辺」について、同書に取りあげられている大野西湘子さんのご家族の澤田陽子様からご丁寧な読後感(お父上の思い出、皆様と当協会への感謝など)を青梅の会の神野美代子さんを通して頂きました。会員の投稿ではありませんがそのまま本号の3頁から4頁に掲載いたしましたのでぜひご覧下さい。池田会長曰く、このお手紙を頂戴しただけでも本書刊行の意義があった、と。

今後本書に関する会員の皆さまからの感想文(佃さんとの思い出や内容への感想など)をお願いしようと考えています。その節はご協力お願いします。